



Title	「絆」を崩したものは：チヌア・アチェベ Things Fall Apart における主人公の「移動」に関する一考察
Author(s)	村上, 八重子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2010, 2009, p. 35-43
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77356">https://hdl.handle.net/11094/77356</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「絆」を崩したものは

——チヌア・アチェベ *Things Fall Apart*<sup>1</sup>における主人公の「移動」に関する一考察——

村上 八重子

### 1. はじめに

ナイジェリア生まれの作家、チヌア・アチェベ (Chinua Achebe, 1930-) の第一作である *Things Fall Apart* (1958) に関しては、すでにさまざまな角度から論じられてきた。

アチェベは、「アフリカのイメージ—コンラッドの『闇の奥』におけるレイシズム」(“An Image of Africa: Racism in Conrad’s *Heart of Darkness*”) においてコンラッドのアフリカとアフリカ人表象を批判したが、それらを内部から再評価し、価値付けを行うということだけを目的としてこの *Things Fall Apart* を執筆したのでは勿論ない。

ナイジェリア独立の二年前に発表された本作は、白人の入植やキリスト教のひろがりをも一つの契機として、主人公の Okonkwo というイボ族の男性が悲劇的な最期を迎える過程と、彼の部族とその周辺の諸部族が長年守り続けてきた伝統や人々の絆が崩壊していくさまを描いたものであるが、西洋や近代、という外的な要因のみならず、部族内部からの崩壊という面も当然見過ごされてはいない。また、主人公自身のアイデンティティ崩壊、という点にも注意を払うべきであろう。

それはアチェベが複数の文化や価値観に幼いころから接する環境に育った、ということと関係がある。父は catechist というキリスト教文化の家庭と、伝統的な習慣や儀式を保持しようとする村での生活体験が、彼の作品には大きく影響している。

彼に限らず、人間の行動は一面的なものでは絶対にありえない。また、他の文化を完全に排除するのではなく、自らに益となるもの、たとえば銃器や生産にかかわる道具などは積極的にとりいれようとする人々がいることは当然であり、衣料や作物、医療の知識など、最初は積極的でなかったにせよ、次第に生活に浸透していくことは容認しよう、ということも大いにある。人間が交易により物資や情報のやりとりをする以上、それは避けてとれない道筋である。

しかし、ある事物に自分の存在意義を見出して、それをアイデンティティのよりどころとしている場合、あるいは別の新たなものをそのよりどころにしようとする場合、そこに

---

<sup>1</sup> 本論で扱うテキストはすべて Chinua Achebe: *Things Fall Apart* (Heinemann, 1986) を使用し、カッコ内の数字はページ数をあらわす。タイトルの邦訳は、古川博巳『崩れゆく絆』、土屋哲は『部族分解』としている。

は当然葛藤がつきまとう。

*Things Fall Apart* の主人公 Okonkwo は、父を人生の失敗者とみなし、それを反面教師として生きてきた人物である。彼は部族の伝統的な社会において、名誉を求め、長く続いた勇者として列せられ続けることを望んでいる。しかし、彼のその望みを断ち切るような事件が起こり、彼は結局自ら死を選んでしまうのである。

*Things Fall Apart* において部族の絆を一番必死に守ろうとした人物であるはずの Okonkwo もまた、その内部崩壊の一端をも担った存在であるということは大いに考えられる。ただ、彼の直接の言動からこれを裏付けることは容易ではない。後述するように、Okonkwo は偉大な弁者であったことは一度もなく、感情を外に出すに際して暴力という形をとってしまう人物だからである。それではどのようにそれは示されているのだろうか。

本論では、主人公の言動のなかから、「移動」に注目したいと思う。

その理由としては、まず先ほど述べたように、主人公の思いは、彼の発言や目に見える形での行動からは判断するのが困難だからであり、次に、彼と「移動」をともにする周囲の人々が、その思いが投影される対象として描写されている、と考えるからである。

「移動」や「越境」とは単に物理的な距離を動くことや、場所の変更をあらわすだけにとどまらない。そこには異なった文化や価値観に触れ、ものの見方や行動に変化をもたらす体験をも含まれると考えられる。

距離にかかわらず上に挙げた意味での「移動」をいくつかとりあげ、絆の崩壊との関連を考えたいと思う。

## 2. 主人公 Okonkwo の移動・(1) 同行

物語の舞台である Umuofia 村を含むナイジェリア下流の地域では、それぞれの部族は互いに戦争をしたりもするが、同時に人々は儀式を重んじ、知恵ある長老たちは尊敬され、出来事は繰り返し語り継がれてきた。特に語りの技術は高く評価され、さまざまな伝説や教訓話は「ことばを人々がよく消化するための潤滑油」としての役割を持っていた。

Umuofia 村に住む Okonkwo は近隣の九つの村のみならず、さらに遠くまでその名がとどろく勇猛な戦士である。ある日、村の娘が市で殺害され、宣託により殺害者の住む村、Mbaino に報復することではなく、殺された娘の代わりとなる少女と、人質の若者を連れ帰ることが決まる。そして、Mbaino へ使者として派遣された Okonkwo は、その若者 Ikemefuna の面倒をみることになる。

三人の妻と八人の子どもを養い、村人の尊敬を集めている Okonkwo は、「失敗」や「弱さ」を我慢することができない人間である。自分より劣っている、と思われる相手に対しては非常に横柄な態度をとって年長者にいさめられもする。それは、父親の Unoka を思い起こさせるからであり、父はたった一人の妻さえ十分に食べさせてやることもできず、近所中から借金をしており、最後には病を得て惨めに打ち捨てられたのであった。父はしかし、若いころは楽器の名手で、また、優れた語り手でもあった。反対に、息子の Okonkwo

## 「絆」を崩したものは

は言葉よりも先に力に訴える性格である。この「自分の感情を言葉で表現できない」という点はこの物語において大きな意味を持つ。

後に入植してくる白人たちが、初期に殺害されてしまったのは「言葉が通じない」、という理由からであった。が、やがて共同体から排除された人々を受け入れ、(アルファベットの)読み書きを教える。両方の言葉に通じることができるようになったものを土地の人々と白人との交渉役に重用したことで、仲介役は権力を拡大させていく。もとは集団から忌避された存在が、言葉を武器にしてより大きな組織の手先となって力を誇示するのである。それは誇り高い Okonkwo には耐え難いことであった。このことが結果的に彼を縊死に追いやることになるからである。

人質として Okonkwo のもとに預けられていた Ikemefuna はついに殺されることが宣託によって決まる。それを Okonkwo に告げるためにやってきた長老の Ezeudu は、Ikemefuna が Okonkwo を父と慕う様子を見て、Okonkwo はこのたびの処刑にかかわるべきではない、と忠告する。

*'The boy calls you father. Do not bear a hand in his death.'* (40)

*'Yes, Umuofia has decided to kill him. The Oracles of the Hills and the Caves has pronounced it. They will take him outside Umuofia as is the custom, and kill him there. But I want you to have nothing to do with it. He calls you father.'*(40)

宣託は絶対的なもので覆すことは不可能である。しかし、息子同様に育てた Ikemefuna を殺すことに Okonkwo を加担させない、という長老の判断からわかることは、この部族においては、儀式と同じように家族の絆を重視するという伝統が、全体の繁栄と永続において欠かせないという認識が受け継がれてきたという点である。しかし、Okonkwo は Ikemefuna を失うと知って嘆く家族の姿を、「弱さ」と理解し、自分がそう見られたくないという恐れから、その儀式に参加することを決める。

長らく会えなかった実の親きょうだいのもとへ戻れる、といわれた Ikemefuna は喜びと戸惑いの入り混じった心境を抱えて村はずれへと誘われる。そして Okonkwo はその列の後ろについていく。村の境界線を目指して進む、これが一つ目の「移動」である。

*He heard Ikemefuna cry, 'My father, they have killed me!' as he ran towards him. Dazed with fear, Okonkwo drew his matchet and cut him down. He was afraid of being thought weak.* (41)

実の兄弟同様に育てられた Okonkwo の長男 Nwoye は、その夜を境に村の伝統や儀式、絶対君主たる父に対して、大きく意識が変わるのを覚えるが、それは実は Okonkwo の内部においても起こったことである。つまり、彼の真の思いは、息子に投影されてあらわれて

いるのである。この点は続く 8 章での彼の様子から知ることができる。

Okonkwo did not taste any food for two days after the death of Ikemefuna. He drank palm-wine from morning till night, and his eyes were red and fierce like the eyes of a rat when it caught by the tail and dashed against the floor. (44)

後に Nwoye はキリスト教に彼の疑問と悩みに答えを求めて出奔するが、Okonkwo はそれ以上深く自分に向き合うことなく、Ikemefuna の死を忘れようと、しゃにむに村の日常に戻っていく。

第 7 章において、村境へ向かう行列に付き従った Okonkwo が歩んだ距離は短いものであったはずである。しかしそれは彼にとって重要な「移動」であったといえる。なぜならば、その過程において Okonkwo の内部ではさまざまな葛藤が存在し、結局 Ikemefuna をその手にかけてことで、彼はある境界を越えてしまったからである。Ikemefuna はもともと彼の部族ではないのだから、その死は「部族崩壊」には厳密には関係がないように思える。しかし、彼の内部ではなにか (things) があきらかに変化しはじめたことが読み取れるのである。

### 3. (2) 追跡

長女 Ezinma は Okonkwo の一番のお気に入りであり、父の感情を読み取ることに長けていた。第 11 章で、その娘が村の巫女 Chielo によって神の住む洞窟に連れて行かれることになる。母 Ekwefi は不安にかられ、夜道を追っていく。そして Okonkwo もまた、彼らの後を追う。これがもうひとつの「移動」である。

'Where are you going?' he asked.

'I am following Chielo,' she replied and disappeared in the darkness. Okonkwo cleared his throat, and brought out his snuff-bottle from the goatskin bag by his side. (72)

神の声を伝える巫女の決定は絶対である。しかし、娘を心配する母の思いはその決定を無視して夜の森へと駆り立てる。そして、その妻をいさめるべき Okonkwo は、彼女を家へ連れ戻すどころか、そのまま行くにまかせ、その後、自分自身も後を追うことになるのである。

家族を心配してのこの行動は、ごく当たり前のことのように思われる。とりわけ、Chielo が「神がその娘に会いたがっている」という理由以外は述べないこと、途中で洞窟への道を誤ること、最終的に娘は無事に帰宅させはしても最後までその意味は不明のままでおかれること、などと対比させると、父と母としての夫婦の追跡には十分に理にかなったものに見える。

しかし、彼らは巫女を恐れつつもその決定に逆らうことを選択する。Okonkwo が道々なにを思ったのかは描写されていないが、彼は妻を罰することはしない。この二つの点において、彼はまたもある関を越えてしまったといえるのである。

Ikemefuna の処刑の日、揺れる心を抱えながら列に従った Okonkwo とは違い、この夜の行動には彼の内心の葛藤をあらわす部分がまったくない。妻に追いついた後、夫婦がそろって洞窟の付近に身を潜めている様子さえ、どこかのんびりとした雰囲気が漂う。「Chielo が実の娘のようにかわいがっている Ezinma に害をなすはずがない」、という考えになんとかすがろうとする必死さもない。反対に、無事を最初から信じて疑わなかったかのように、つまり、神の言葉と言っては時に突飛な行動をとる隣人につきあい、もしものときには飛び出していく用意をしておく、といった、ある冷静さや距離を感じるからである。

‘Go home and sleep,’ said Okonkwo. ‘I shall wait here.’

(...)

As they stood there together, Ekwefi’s mind went back to the days when they were young. (76)

この場面からは、神の言葉を運ぶ巫女の絶対性へのゆらぎと同時に、かつて家族に対しては専制君主として君臨していた Okonkwo が妻や娘に対して、支配する対象ではなく、ともに家族としていたわりあう存在として認識をあらためつつあるということが理解できる。Ikemefuna の処刑決定の際にもあったように、家族をいたわるということはこの部族では大事なこととされてきたのだが、Okonkwo にとってはいままで意識されたことはなかったのである。女性の感情を汲み、その行動を理解することはすなわち、彼自身も「女性のように」＝「弱い」存在になる危険をおかすことになる。それは彼がもっともおそれることではなかっただろうか。と同時に、家族や夫婦としての一体感も生じてくるはずである。その複雑な心情をあらわすのは、この場面では妻 Ekwefi である。彼女は夫に対し以前ほど臆することなく、娘の無事を案じつつも、月明かりの下で若い日に二人が結ばれた夜のことを回想するのである。

#### 4. (3) 追放と帰還

Okonkwo の友人 Obierika の娘が婚約し、にぎやかに儀式がとり行われた第 12 章に続き、第 13 章冒頭では村の最高齢であった長老 Ezeudu が亡くなり、同じく盛大に葬式が行われる。埋葬に際し、男たちは故人に最後の敬意を払うべく、銃が発射され、大砲が空に向けて撃たれる。その中で、Okonkwo の銃が暴発し、その破片が死者の 16 歳の息子を殺してしまった。故意の犯罪ではない、という理由から、Okonkwo 一家は報復をまぬがれるが、七年間は村に戻ることは許されない。一家は Okonkwo の亡き母の生まれ故郷である Mbanta へ向かい、母の弟にあたる最長老の Uchendu が、一家を温かく迎え入れる。

この「七年間の追放と帰還」が、主人公の経験する最も長期間に及ぶ「移動」となる。

Okonkwo のここでの行動は、苦境に懸命に耐え、ひたすら働いて家族をやしなうことである。しかしこの村での生活を描写する章において中心をなすのは、Uchendu の存在である。彼は、息子の婚礼の祝いや、あるいは Okonkwo が村を去るにあたって謝意をあらわすためにひらいた宴の席で、一族の若者たちに、絆の大切さを繰り返し説く。

ここまで、Okonkwo をこの物語の主人公、と当然のように書いてきたが、実ほどの章においてもときにその存在が希薄になる場面が何度もある。それぞれの人物描写が細かいせいというのではない。また、登場人物に対する語りの色合いが同じ人物に関しても変化(嘲笑的、同情的など)することも多い。それを「語り手の double voice」(Gikandi) に帰することも可能であろうが、Okonkwo の自我のゆれがその人物描写にあらわれている、と考えればその投影された人物に焦点があたることが物語全体の流れを邪魔することはなく、むしろその場面で希薄な存在のまま放置されている Okonkwo にあえて目を向けてやることによって、彼が直面している自我の危機がどれほど切羽詰っているか、ということがわかるのである。

話を元に戻そう。

おじの Uchendu が非常にわかりやすく話し聞かせる一族の絆、その大切さ、若者たちが父をとりまく様子、これこそが Okonkwo の真に欲していた姿ではなかっただろうか。実の父を徹底的に否定し、その間逆を進むことでようやく自らの居場所を村に得た Okonkwo は、よりどころたるべき「力」の象徴である武器の誤作動によってその唯一の居場所さえ追われてしまった。

Uchendu は Okonkwo にさまざまな問いを投げかけるが、彼には何一つ答えることができない。彼が雄弁でないこととは無関係である。それは、Okonkwo がすでに答えを知っているからである。しかし、もし彼が答えれば、それは彼の自我の一部と認めることになってしまう。それは彼がいままで必死に築いてきた自分自身と相容れないのである。

‘(...) But there is just one question I would like to ask him. Can you tell me Okonkwo, why it is that one of the commonest names we give our children is Nneka, or “Mother is Supreme”? (...)’

There was silence. ‘I want Okonkwo to answer me,’ said Uchendu.

‘I do not know the answer,’ Okonkwo replied.

‘You do not know the answer? So you see that you are a child. You have many wives and many children – more children than I have. You are a great man in your clan. But you are still a child, *my* child. (...)’ (94、斜字部原文通り)

失った七年間と、その間に得られるはずだった名誉や地位を Okonkwo は悔やんでも悔やみきれない。いや、七年よりももっと、さかのぼれるなら父や母が生きていた子どものころにまで彼は戻りたかったのではないだろうか。父の話や音楽すらもっと違った態度で受け止めることができたのではないだろうか。しかし時間はもう戻せない。彼は村に戻るや

否や、失った名誉や地位を早急に取り戻そうとする。それだけが彼にできることである。しかし村は悲しむべき変化を遂げており、Okonkwo には武力での解決しか提案できない。だが友人の Obierika にはこの村の変化さえ、もう取り戻すには遅すぎる、と告げられるのである。

## 5. おわりに

人間は誰しも生まれ、老い、死んでいく。若いころに勇猛果敢な戦士として賞賛を浴びたとしても、その後長老として真に尊敬されるには、その知恵を後の世代に伝える messenger であらねばならない。幼いころから父を軽蔑し、思いを語ることを避けてきた Okonkwo は、外敵の侵入に対しては武力で対することしかできなかった。それさえも封じられ、辱められたとき、彼に残された唯一の方法は、白人の手先となった messenger を殺害し、自らも死を選ぶことであった。

Okonkwo はそれまでの勝者をレスリングで打ち負かしたことによって勇者の列に加わり、収穫においては、儀式にのっとり先祖に供物をささげることによって過去から未来への継承者としての自分を確立させてきた。また、Ikemefuna を連れ帰ったときの Okonkwo は、九の村々を代表する使者 (to carry a message) として選ばれたのであった。(19)

彼の誇りをかけた争いと、敗れたものとしての身の始末は (それが神に許されない方法だったとしても)、部族のあいだで長く語り継がれ、伝説となってしかるべきであった。しかし、もはやそれさえ許されてはいない。少し長くなるが、物語の結末部分を引用する。

In the many years in which he had toiled to bring civilization to different parts of Africa he had learnt a number of things. One of them was that a District Commissioner must never attend to such undignified details as cutting down a hanged man from the tree. Such attention would give the natives a poor opinion of him. In the book which he planned to write he would stress that point. (...) Every day brought him some new material. The story of this man who had killed a messenger and hanged himself would make interesting reading. One could almost write a whole chapter on him. Perhaps not a whole chapter but a reasonable paragraph, at any rate. There was so much else to include, and one must be firm in cutting out details. He had already chosen the title of the book, after much thought: *The Pacification of the Primitive Tribes of the Lower Nigers*. (148)

部族の人々と西欧社会の (不十分な) 仲介者たる messenger を殺害したことによって、Okonkwo の人生は地方長官が異郷で体験した多くの奇妙なエピソードのひとつとして、歪曲され、切断され、固定されることになってしまった。

口承文化の特徴として、語り手だけでなく、聞き手との関係性が個々の物語を固着させることなく、さらに生成していく可能性があるということがあげられる。母たちの語るさまざまな物語を聞くのが好きだった長男の Nwoye は、同じく宣教師の語る聖書の物語や賛



美歌に魅了される。そこにある違いは、キリスト教の示す「ただ一人の神」、「唯一の真実」という不変性であり、そこに Nwoye は皮肉にも慰めと答えを見出したのである。

語り手としての自分について、アチェベは以下のようにインタビューで述べている。

*Rowell (Interviewer):* Earlier you said, “I see myself as a storyteller.” What do you mean?

*Achebe:* Well, that’s just a manner of speaking, of again relating myself in the manner of the proverbs we are talking about to something that had happened before. (...) The story has always been with us, it is a very old thing, it is not new; it may take new forms, but it is the same old story. That’s mostly what I’m saying, and we mustn’t forget that we have a certain link of apostolic succession, if you like, to the old griots and storytellers and poets. It helps me anyway; it gives me that sense of connectedness, of being part of things that are eternal like the rivers, mountains, and the sky, and creation myths about man and the world. The beginning was a story, it is the story that creates man, then man makes other stories, you see. (...) This is how stories came into being, and this is what they did for our ancestors, and we hope that they will continue to serve our generations, not in the same form necessarily, but in the same spirit. (269-270)

Uchendu の姿が重なる。キリスト教の宣教師たちや商人たち、最終的には大英帝国の官吏たちがアフリカに移動してきたことと比較すると、Okonkwo の移動はとるに足りないものである。しかし、火気の使用からわかるように、彼らの時代にはすでに西洋の影響が及んできていた。Uchendu のいうとおり、Okonkwo を含め、次の世代の若者たちはすでに Uchendu の若いころとは様変わりしてきていた。新旧の事物が入り混じり、各自の価値観も大きく変化する移り目にあつたと考えられる。Okonkwo の「移動」とはつまり、行きつ戻りつする彼の内面の動きに対応しており、自らの思いを語るすべも、また文字に書き残すすべも、どちらも持ち得なかった Okonkwo は、肉体的な力さえよそから持ち込まれた「法」に裁かれて退路を断たれる。その行動をもはや周囲のものは誰も理解できない。唯一の友 Obierika すら、長官にはむかおうとまではしない。彼は、部族の絆に刃をつきたてたのは白人であると Okonkwo に言ったが、Okonkwo が縊死を遂げた縄が切られた瞬間に、その絆は完全に断ち切られてしまったのである。

絆を崩したものは、単独の要因ではない。もちろん外部からの（西洋の）暴力的、かつ一方的な力の行使でもなかった。白人と土地の人々との間を仲介する messenger(s)は「内部」の裏切り者としてたやすく指摘できるだろうが、内部崩壊につながる要素はさまざまな形で、作品全体を通して仕掛けられていたのである。

主要参考文献

Ezenwa-Ohaeto. (1997) *Chinua Achebe A biography*. Indiana University Press.

Jeyifo, Biodun. 'For Chinua Achebe: The Resilience and the Predicament of Obierika' in Francis Abiola Irele (Ed.) (2009) *Chinua Achebe THINGS FALL APART Authoritative Text Contexts and Criticism*. New York, London: W.W.Norton & Co.

Gikandi, Simon. (1991) *Reading Chinua Achebe*. Heinemann Portsmouth (N.H.), Heinemann Kenya Nairobi, James Currey London.

Okpewho, Isidore (Ed.) (2003) *Chinua Achebe's Things Fall Apart A Casebook*. Oxford University Express.